

◎野木京子 11月

クリスタルグラスが触れ合う

イメージで

コトバが朝につける傷あと

まちりこ（埼玉県）

\* 絶妙な繊細さ。クリスタルグラスは無色透明の結晶。朝の光をあびると、言葉まで透明に輝く。無垢な自然である朝の光に、人間の言葉という文明が傷をつけるのだろう。

私しかいない車両に傘二本

浅葱（愛知県）

\* 一行のみで、からんとした空間の広がりを感じさせる。持ち主不在の傘が強烈な存在感を放っている。傘には傘の物語があるようなのだ。

木のうろを

見ないふりして

生きている。

たんころぶ（兵庫県）

\* うろの内側は、外からはまったく見えない。だから、こっそり小人が住んでいるかもしれない。そんな異界の住人に気を取られたら、日常生活が大変なことになるから、見ないふりをする。生とは反対の、死の世界も隠れているかもしれない。

写真撮って

勲章乞う様に 吾子は云う

仰せのままに 母は跪く

さくらママ♪（兵庫県）

\* 親と子の立場の逆転が描かれて、ユーモラスでほほえましい風景。胸をはっている子どもの姿も見えるようで、子への愛情が不思議なニュアンスで表現されている。

売られゆく仔豚の目をし

いもうとは漢字テストを

そろそろと出す

さいう（愛知県）

\* 「売られゆく仔豚の目」を見たことはないけれど、ものすごく悲し気な怯えた目だと想像できる。妹の顔と仕草が見えるようで、観察する作者の視線もかわいくてあたたかい。

傾いた半月 中身が少しずつ  
こぼれて三日月になってゆく

猫谷圭希（広島県）

\*金色の砂が空からぼろぼろこぼれていく映像が目に浮かんだ。なるほど、半月はそういうふうにも三日月になっていくのか。映像的で発想も楽しい。時間という砂が落ちていくことの、寂しさも漂っている。

いつからか風船が  
重く見える

降旗 沃（東京都）

\*風船は重くないけれども、作者の心が鉛のように重い。風船という軽いものからさえ重圧を受けてしまう、切なさを感じた。

みずからの海を  
胎児に分け与え  
叔母のからだは揺りかごとなる

さいう（愛知県）

\*さいうさんの詩を、今月も佳作に複数選んだ。この詩もきわめて印象的。叔母の子宮内で、羊水の海が揺れているのを感じさせられた。

気怠げに冬のホームで整理する  
鞆に散らばる色鉛筆を

松下 誠一（東京都）

\*色鉛筆のそれぞれの色が、鮮やかに目の前に見えるようで、映像的な詩だ。

胸に乗る  
小さな重み愛しくて  
寝不足な僕  
知らない人の肩借りうたた寝

黒井音古（兵庫県）

\*胸に乗るのは幼い我が子の重みだろうか。それが電車内での他人の肩へと、重みと体温が連鎖していく様子に、人間味が感じられてよかった。